

第一次世界大戦前にイランに輸入された 東アジア産品の動向

－中国産緑茶の輸入の盛衰を中心に－

吉 田 雄 介

I はじめに

東アジアとイラン間の交易の歴史は古いが、こと近代の貿易に関していえば、イランから中国に向けた輸出が輸入に先んじて大きく成長する。これはイランからボンベイを経て中国への悪名高いアヘン輸出である¹。ところが、逆の方向、つまり東アジアからイランへの輸出に関しては、第一次大戦前はほとんど存在しない。ただ、この表現も正確ではない。短い期間ではあるが、1880年代から90年代半ばにかけて、ペルシア湾東岸のバンドルアッバース港からイラン内陸の交易拠点ヤズドないしケルマーンを経由して、マシャッドに至り、さらに国境を越えてアシガバードやブハラに向かう中国産緑茶のトランジット輸出が相当な規模で存在した。本稿の目的は、この第一次世界大戦以前の東アジアからイランおよびイラン経由で中央アジアに向かったトランジット貿易の動向をイギリスの領事報告（Diplomatic and Consular ReportsやDiplomatic and Consular Reports on Trade and Finance）を資料として明らかにすることにある。

日本とイランの近代の貿易関係は、例えば、幕末の日本から蚕卵紙がイランに輸入されたことなど興味深いエピソードも少なくない。これは1865年にペブリンの流行のせいで、イランの養蚕業は壊滅状態になると、1867～69年にギーラーンの有力な生糸商のラリ兄弟社が、日本から試

(30)

験的に蚕卵紙を輸入したのである²。ただ、このように古くからわずかな輸出はなされたものの、継続的でも大規模なものでもなく、散発的なものにとどまった。また幕末から日本では生糸と茶の2品目が主力輸出品となるが、この2品はほとんどイランへは向かわなかった³。

東アジアからイランへの輸出についても本稿では簡単に検討するが、結論を先に述べると、統計的にはイランが輸入した産品に日本製品のプレゼンスはほぼない。東アジアに範囲を広げても、中国茶のみが一定量輸入されたとどまる。もちろん、この事実をもって、中国や日本製品がイランに輸出されなかったという短絡的な理解はできない。第一次大戦前にも、インド経由の輸出はそれなりにあったと思われるが、統計上は日本からの輸入も中国からの輸入も少ない。それはもちろん、日本製品の輸出競争力がまだ乏しかったことに起因しよう。そしてもうひとつは日本から直接輸入されなかったために、見かけは日本製品ないし日本からの輸出に分類されていない点に理由があるだろう。量や額が少なければ、統計の項目では「その他」に包括される。あるいはいったんインドなどに輸出されてから再輸出されると出所がわからなくなる。辛うじて、本稿で扱う中国産緑茶はボンベイ経由で輸出されたものの、統計に現れる。

本稿ではイギリスの領事報告を利用するが、イギリスの大使館・領事館は最初はイランの北部に設けられたため、イギリスの領事報告から得られる情報は当初はイラン北部に限られる。一方、東アジアから産品がインド経由で輸出されたと推測されるイラン南部ペルシア湾岸のブーシェールなどの情報についても1880年前後から領事報告に現れるが、これも当初はケシ栽培などアヘン輸出関係の情報が中心である。その点で、本稿の検討は情報の乏しさが問題となる。ただ、統計の不備はあるとしても、イギリスの領事報告は総合的かつ継続的な貴重な情報源であり、

ここから当時のイラン・東アジア間の輸入貿易について可能な限り明らかにしたいと思う。

なお、ロシアへの中国茶の輸入に関しては、左近がロシアの海運史研究の一環で検討している。ロシアへの茶の輸入の研究史に関しては、第3章の冒頭で手短かにまとめてくれているため、たいへん参考になる。ただ、左近の研究においてはあくまでロシアへの茶輸入が対象で、ロシア領中央アジアへの茶輸入に関する言及は少ない⁴。また、左近は、先行研究を踏まえ「紅茶」と「ブラックティー (black tea)」を区別すべきとしており、本稿でもこれに習い「ブラックティー」と表記する⁵。

あるいは、近代のホラーサーン地方の交易に関しては、水田の一連の研究を挙げておくべきだろう⁶。この水田の研究では、緑茶のトランジット輸出についても若干触れられているが、やはり主たる部分はアヘン交易に関する検討に充てられている。

II イランの地理的条件と市場の分断

1. イランの国土とトランジット貿易

タイトルには「イラン」と入れたが、「イラン」を輸出先としてひとつにくくるべきではない。通信・交通テクノロジーの限度からイランは世界システムへの組み込みが遅れた。イランの国土には巨大な山脈が走り、山脈の間には広大な沙漠が横たわる。この物理的な障壁のせいで物資の輸送は難しく、ナショナルマーケットの成立も難しかった。

こうした気候や地形の困難を越えて、交易がおこなわれた。「チャを含むツバキ科は、主に湿潤な熱帯から温暖帯に分布⁷」するため、中央アジアでは商業的な栽培は困難であり、湿潤な温帯からの輸入に頼らざるを得ない。また、今でこそ黒海沿岸やカスピ海沿岸部では大規模に茶樹が栽培されているが、これも古いことではない。1893年にロシア初の茶

園が、黒海沿岸のグルジアの町バトゥミに開園され、このバトゥミでの茶とオレンジ栽培の成功を参考にして、トルコでも第一次大戦以前に黒海沿岸のリゼ (Rize) 地区で試験的な栽培が開始された⁸。イランでは、モハンマド・ミールザーが茶を隠してインドからイランに持ち込んだという説もあるが、「イランで試すために、茶の種子、4千本の茶やコーヒー、麻、肉桂、丁子、カルダモン、マンゴー、キニーネ、樟脳、ターメリック、ショウガ、その他の苗を購入し…⁹」と西暦1900年にインドからイランに帰国の際に茶を含む多様な植物の種や苗木を合法的に持ち込み、この後、イランでもカスピ海沿岸のギーラーン地方で茶の栽培が開始された。したがって、本稿で対象とする時期には、イランだけでなく、ロシアやトルコでも茶栽培は試験的に開始されたばかりで、これら地域への茶の輸入も東アジアないしインドからということになる。

本稿で対象とするのが中央アジアの緑茶交易である。ユーラシア大陸の中央部に位置する中央アジアは、イランあるいはアフガニスタン、中国、ロシアから陸路で、物資を輸入し、また逆に輸出した。イラン経由で中央アジアに至るルートは複数考えられるが、中でも重要なのがペルシア湾岸からホラーサーンに至る隊商路である。ホラーサーンは、イラン北東部を指す地域のことである。古くはアフガニスタンやトルクメニスタンの一部を含む広大な地域を指した。

イランのホラーサーン地方は、遠く離れたペルシア湾と中央アジアを結ぶ交易路として重要である。この点を踏まえて、当時のイランの地理的条件について確認しておこう。イランは、東は南アジアや中央アジアと、西はアラブ世界、南はインド洋、北はトルコやカフカス、中央アジアあるいはカスピ海経由でロシアとつながる東西交易の好立地に所在する。古代から様々な商品が交易されてきた。ただ、図に示したように、西には巨大なザークロス山脈、北には峻険なアルボルズ山脈、そして両

山脈にはさまれたイラン高原の中央部には広大なキャヴィール沙漠とルート沙漠は鎮座していた。したがって、交通機関が発達するまでは、これら自然の障壁のせいでイラン国内を横断するには相当な困難をともなった(図1)。

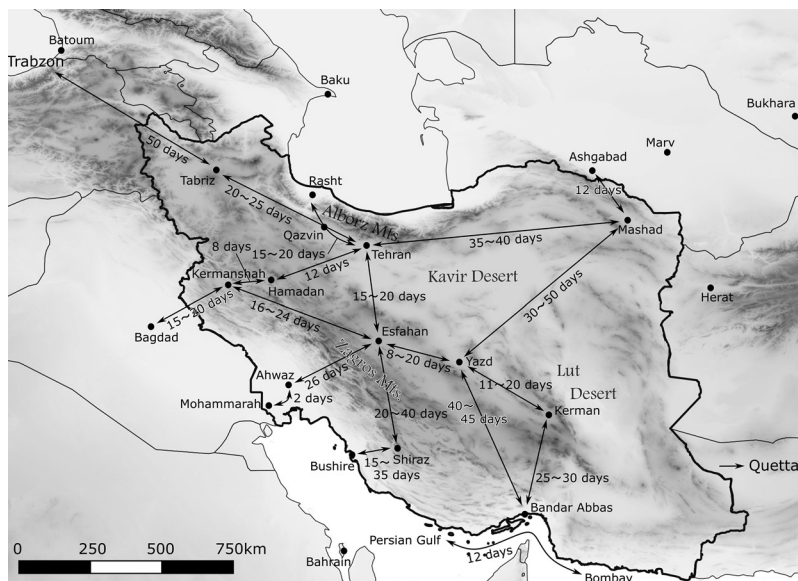


図1 イランの主要都市と都市間の輸送日数

出 所：“Report on the Condition and Prospects of British Trade in Persia by H. W. Maclean, Special Commissioner of the Commercial Intelligence Committee of the Board of Trade.”GBPP 1904, XCV, A&Pから作成。一部、“Report for the Year Ending March 20, 1911, on the Trade of Ispahan and Yezd.”GBPP 1912, A&P, DCRTF AS 4838 から補った。

注：地名および国境線は現在のそれで記入した。

たとえば、本稿で対象とする時期にはボンベイからペルシア湾までは定期蒸気船が整備されていたので、これに乗れば12日前後で到着する。ペルシア湾の入り口のバンドルアッパース港で水揚げされた荷物は、当時はラクダやラバの背に乗せて内陸に送られることになるが、ケルマーンまでは一か月程度、ヤズドであれば40～45日を要する。したがって、バンドルアッパース港からイランの北西に位置するホラーサーン地方の

(34)

最大の都市マシャッドまでは、4ヵ月前後を要した。

なお、マシャッドとアシガバード間は、早い時期にロシア領とのアクセスの向上のためにロシアの手で道路が整備されており、12日で到着することができた。アシガバードからはロシアの建設した鉄道を利用して、メルヴやブハラなど中央アジアの各地に比較的容易に輸送が可能である。また、イランの近代化のシンボルが、ペルシア湾とカスピ海を接続したトランスイラニアン鉄道である。1927年に建設をはじめ、1938年に完成すると、所要時間はテヘランからペルシア湾へは30時間、テヘランからカスピ海へは15時間に飛躍的な短縮が実現されたが、本稿の対象とする時期とは関係がない¹⁰。

2. 1880年代までの茶のトランジット貿易

新疆経由での中国からブハラへの茶輸出は、バーンズ (Burnes) が旅した1832年には「950馬荷分の茶つまり20万lbs.ほどの茶が、この年、ヤルカンドからボハラ (Bokhara) に運ばれた」¹¹とされる。一方、バーンズに同行して1832年にブハラやマシャッドを訪れたラル (Lal) が「ボハラとペルシアの交易は、マシャッドをホラーサーンで最も人口が多く豊かな都市にした…緑茶はボンベイからやって来る、そしてブラックティーはロシアから。しかし、前者は安価で、住民に好まれている」¹²とも述べている。イランやアフガニスタン経由による中央アジアへの緑茶輸入は歴史が古いことがわかる。

また、後年の領事報告では、1870年代には中国産の緑茶ではなく、インドで栽培された緑茶がイランやアフガニスタン経由でブハラなど中央アジア市場に輸出されていたと主張する。1897年の報告では、正確な値は不明としながらも、20年前にはインド3つの産地 (Kamaon, Dum and Kangra) から600万lbs.の緑茶が中央アジアとアフガニスタンに供給

第一次世界大戦前にイランに輸入された東アジア製品の動向 (35)
されていたと述べている¹³。また1895年の報告では、かつてのインド産
緑茶のトランジット輸出が消滅した理由を検討し、以下のように結論づ
けている。

なぜ緑茶は、忽然としてインド産から中国産に変わったのか。そ
の理由はまったくもって不明である。私が先に説明したように、取
引業者はその茶の仕入れをやめ、栽培業者はその製造をやめた。中
央アジアの取引業者が、中国茶をインド産に代用するために、中
国との直接取引を手配したわけではないことは確かである。おそ
らく冒険的な中国ないしボンベイの商人が時代の機微を読んで、マ
シャッド経由で送るために中国茶をボンベイ市場に発送するよう
になったのだろう。しばらくすると茶価格は北インドで下落し、こ
とによると英国人農園主は価格の引き下げを拒んで、ブラックティー
の製造に転換したため、それから転換が急速に進み、世界の市場に
中国産茶が進出し始めた¹⁴

ただ、1879年のブーシェール (Bushire) 港の輸入を確認すると、輸
入額の合計は18,776,900ルピーに達したが、そのうち茶についてはイン
ドから100,000ルピーが輸入されたに過ぎず、輸入総額の1%にも達しな
い¹⁵。なお、前年の1878年の茶の輸入は50,000ルピーとさらに少なかっ
た¹⁶。同様に、1879年のリング (Lingah) 港への茶の輸入はインドから
2,000ルピーがあっただけである¹⁷。前年 (1878年) のリング港への茶の
輸入は1,000ルピーにとどまった¹⁸。また、バンドルアッバース (Bundar
Abbas) 港の統計はこの時点では領事報告に掲載されていないため、バ
ンドルアッバース港への茶の輸入額は不明である。他方で、黒海の港ト
ラブゾン経由のイランへのトランジット輸入を確認すると、茶は34,870

(36)

£ (1878年)、26,928 £ (1879年)、40,176 £ (1880年) とかなりの額が輸入されていた¹⁹。

それでは、いつ頃からインドからペルシア湾経由で中央アジアに中国産緑茶が輸出されるようになったのだろうか。1885年のイランの各地の輸出入に関する情報をHerbertが苦勞をして整理している。そのうち、ホラーサーンへのイギリスからの輸入は総額510,260トマン (Tomans) (170,083 £) で、そのうち緑茶・ブラックティーが4割に当たる200,000トマンを占めた²⁰。これをポンドに換算するとホラーサーンへの茶の輸入は、66,665 £に相当する。ヤズドの説明部分では、「緑茶はヤズドでは全く消費されないものの、5,000から6,000箱が毎年、ホラーサーンやボハラに通過する」としている²¹。1880年代半になるとそれなりの量の緑茶が中央アジアにトランジットされていたことがわかる。

Ⅲ 1890年代の緑茶貿易の拡大と衰退

1. 輸出入に占める東アジアのプレゼンス

(1) 輸出入統計に見る東アジア産品

当時、東アジア産品の多くは一度インドに運ばれ、さらにそこからペルシア湾岸の諸港に船で送られた。ペルシア湾岸の海港としてはブーシェールやバンドルアッパース、リングなど複数存在し、湾の最奥からシャトルアラブをさかのぼった河港としてはモハマッラー (Mohammerah) がある。中でも当時の主力貿易港は、ブーシェールとバンドルアッパースである。リング港も輸入金額ではこの2港に匹敵するが、その多くはペルシア湾の対岸からの真珠輸入が占め、茶の輸入は極めて少ない。

ペルシア湾の北東に位置するブーシェールは、イラン南部の主要都市シーラーズおよびさらに内陸のエスファハーンと交易路がつながる。一

方、バンドルアッバースはよりペルシア湾の出口に近い位置にあり、ここから隊商路がイラン中央部の交易都市ヤズドや南東部のケルマーンにつながり、さらにイラン北部や中央アジアに接続した。こうした港や内陸の交易都市を通じて、ペルシア湾岸から内陸に物資が供給されるだけでなく、逆に内陸から物資が集散され、輸出のためにペルシア湾岸の港に送られた。このブーシェールとバンドルアッバース港の19世紀末の輸出入の金額を表1に示した。ブーシェール港の輸入はイギリスおよびインドからの輸入でほぼすべてを賄われた。一方、バンドルアッバース港の輸入はほぼ全量がインドからの輸入と言って差支えがない。大英帝国の通商網ががちりと組み込まれていたのである。

中国からの輸入額はブーシェール港についてはほぼ毎年掲載されているが、全体から見ればごくわずかである。バンドルアッバース港については、ようやく1900年になって「中国」や「日本」の項目が設けられる。本稿で扱う中国産の緑茶のように、インドからの輸入品の中に中国や日本からの産品も含まれると推測されるが、統計からはわからない。一方、中国への輸出はアヘンが大半を占める。そのため、イランにおけるアヘン輸出の主力港であるブーシェール港については中国向けの輸出金額がイギリスやインド向けを上回る。ブーシェール港ほどではないものの、バンドルアッバース港についても1880年代の終わりまでは中国への輸出額は大きく、これはすべてアヘン輸出である。冒頭で述べたように、近代のイランと東アジアの交易は、アヘン輸出から始まったのである。

表1 ブーシェールとバンアダルアップバース港の輸出入額

	1888	1889	1890	1891	1892	1893	1894	1895	1896	1897	1898	1899	1900	1901
ブーシェールの輸入額														
Japan	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	325
China	8,332	6,714	-	14,129	6,486	6,133	12,698	8,048	3,844	10,950	13,723	13,495	17,501	16,726
Great Britain	289,465	415,452	668,638	850,555	583,738	476,270	534,109	679,723	394,097	773,883	401,637	441,922	715,437	899,880
British India and Colonies	238,903	328,566	514,482	328,820	371,754	384,262	388,389	248,007	229,596	208,503	230,522	224,860	277,542	318,180
その他	12,521	42,675	89,860	40,844	67,937	99,363	84,310	81,139	160,762	151,993	197,580	236,251	312,583	396,692
Total	549,221	793,407	1,272,980	1,234,348	1,029,915	966,028	1,019,506	1,016,917	788,299	1,145,329	843,462	916,528	1,323,063	1,631,478
ブーシェールの輸出額														
China	139,140	212,444	344,923	299,643	307,582	179,631	228,694	176,026	160,392	161,460	176,610	289,267	313,500	265,122
Great Britain	51,924	83,990	74,198	128,709	70,657	105,832	97,465	156,794	106,707	96,855	115,471	78,308	155,174	110,179
British India and Colonies	132,074	167,912	224,283	171,347	131,273	157,116	104,259	68,844	76,466	75,798	72,522	95,273	135,974	90,532
その他	79,538	86,192	91,176	81,500	121,358	79,386	131,417	127,163	96,746	58,419	62,118	66,500	105,690	107,816
Total	402,676	550,538	734,590	681,199	630,870	521,965	561,835	528,827	440,311	392,532	426,721	523,348	710,338	573,649
バンダラルアップバースの輸入額														
Japan	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	305
China	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	18,419
Great Britain	53,961	7,505	7,654	1,189	9,375	6,080	3,417	15,773	38,115	64,517	83,322	86,197	69,597	159,192
British India and Colonies	219,170	336,677	383,092	438,126	259,060	363,220	522,138	419,553	303,138	283,778	338,415	435,261	204,306	163,738
その他	17,499	23,332	43,002	26,155	10,224	23,607	19,931	42,928	27,523	33,267	27,642	24,054	65,043	99,805
Total	290,630	361,514	433,748	465,470	278,659	392,907	545,486	478,254	368,776	381,562	449,379	545,512	338,946	422,735
バンダラルアップバースの輸出額														
Japan	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	689
China	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Great Britain	128,203	129,231	128,631	90,514	37,300	36,578	38,889	45,533	27,882	64,300	35,437	48,367	5,111	24,714
British India and Colonies	7,615	137	269	129	1,715	1,846	6,944	4,167	2,371	1,493	730	1,387	5,669	-
その他	123,173	185,121	200,385	145,959	170,988	168,543	187,173	232,509	122,760	119,166	111,620	105,748	86,363	119,878
Total	297,035	344,037	359,507	264,948	219,887	240,124	270,636	324,920	180,147	230,781	186,652	202,232	102,671	154,613

出所：各年度の領事報告から作成した。

注：バンダラルアップバースについては、1894年以降はPersian Portsの数値が計上されている。

(2) イランの主要港の茶の輸入額

表2に19世紀末のイランのペルシア湾における主要港の茶の輸入額を示した。茶に関してはブーシェールではなくバンドルアッバース港が最大の茶の輸入港であった。表には、シーラーズへの茶の移入額も示した。ブーシェール港でイランに陸揚げされた産品は、イラン南西部の主要都市シーラーズに送られてからイラン各地に発送された。

表2 ペルシア湾岸の主要港への茶の輸入額

	1888	1889	1890	1891	1892	1893	1894
	£	£	£	£	£	£	£
Bushire	14,248	25,841	32,808	68,100	49,669	75,545	74,668
Lingah	770	1,029	1,731	1,071	906	831	778
Bunder Abbas	64,311	69,486	92,308	98,670	104,787	105,108	214,671
Mohammerah			1,400	962	775	875	728
Shiraz	9,080	9,668	17,215	10,286	19,375	31,385	53,334
	1895	1896	1897	1898	1899	1900	1901
	£	£	£	£	£	£	£
Bushire	42,376	6,216	33,807	52,699	63,947	64,060	81,911
Lingah	667	612	562	750	640	880	4,144
Bunder Abbas	144,900	107,876	66,775	100,386	199,863	130,331	85,894
Mohammerah	788	911	768	1,464	1,870	3,441	4,953
Shiraz	50,000	30,000	39,572	59,062	71,428	85,904	86,900

出所：各年度の領事報告から作成した。

後述するように、中央アジアへの緑茶のトランジット貿易は、1895-96年に突然ほぼ消滅する。同様に、バンドルアッバースの茶の輸入額も1897年に大幅に減少するが、その後回復する。また、シーラーズへの輸入も同じである。前者はバンドルアッバース港からヤズドないしケルマーンを経由で中央アジアへのトランジットルートである。一方、シーラーズはイラン国内用の茶の輸入を示している。つまり、イラン経由の中央アジアへのトランジット緑茶貿易は消滅したものの、イラン国内の

(40)

茶輸入がそれを補ったのである。なお、ブーシェール港からの輸入は、シーラーズを經由してエスファハーンを含む諸都市にトランジットされた²²。ただし、後述するようにこの表のあとの時期になると、緑茶のみならずペルシア湾諸港へのすべての茶の輸入が激減する。

2. 緑茶のトランジット輸出の拡大と突然の衰退

(1) 緑茶のトランジット輸出の拡大

まず、ホラーサーン経由の中央アジアへの緑茶のトランジット輸出についてみておこう。ホラーサーンに領事館が開設されてからは、統計が利用できるようになる。表に示したように、1889-90年にはこの貿易額は10万£に達していた。同様に1890年代前半は、毎年10万£を超える金額の緑茶がロシア領にトランジット輸出された。そして、ピークである1894-95年には20万£を超えた。この年、バンドルアッパース港にインドから輸入された産品に占める緑茶の比率は7割に達した。この表は、先のペルシア湾諸港の茶輸入量の数値とは異なるが、傾向は同様といえる。

表に示したように、バンドルアッパース港からヤズドないしケルマーン経由でホラーサーン地方に運ばれた緑茶は、この時期にはこのルートでの総輸入の5割から7割を占める最重要な産品だった。しかもこれら緑茶はイラン国内ではほぼ消費されず、ほとんどそのままロシア領に送られたトランジット貿易だった。そして、ロシア領へのトランジット輸出品の大半が緑茶であった。インド政府の情報では、「緑茶、これはボンベイとロシア領中央アジア間の貿易において群を抜いて重要な部門である²³」と評価された。ところが、20万£以上のトランジット輸出に成長した1894-95年の翌年には、急に輸入量が数分の1に減り、1898-99年以降はほぼなくなった。緑茶の輸入額が大幅に減った結果、ロシアへのトランジット貿易自体が大幅に減少したのみならず、バンドルアッパース

表3 茶の輸入額（バンドルアップバス港）とロシア領への通過分

	バンドルアップバス経由でインドから輸入分					ロシア領に通過分				
	茶の内訳			総輸入 £	緑茶の 割合 (%)	茶の内訳			総通過 £	緑茶の 割合 (%)
	緑茶 £	紅茶 £	その他の茶 £			緑茶 £	紅茶 £	その他の茶 £		
1889-90	125,714	17,143		184,533	68.1	122,857				
1890-91	117,781	28,269		254,223	46.3	98,365			記載なし	
1891-92	125,987	21,241		198,187	63.6	131,940	16,115		記載なし	
1892-93	169,299	24,442		245,782	68.9	159,900	13,166		185,939	86.0
1893-94	123,174	27,424		211,565	58.2	124,309	11,471		147,249	84.4
1894-95	222,318	24,191		312,123	71.2	222,318	5,690		251,370	88.4
1895-96	57,729	38,030	46,425	199,167	29.0	30,225	2,970	83,500	122,995	24.6
1896-97	43,145	10,865	7,545	89,547	48.2	41,550	780		42,824	97.0
1897-98	39,510	28,399	2,510	130,282	30.3	33,067	8,388		47,199	70.1
1898-99	25,112	15,297	1,710	123,328	20.4	8,193	3,021	4,640	20,654	39.7
1899-00	32,027	26,169	3,610	142,099	22.5	8,741	4,403	1,990	15,759	55.5

出所：各年度の領事報告から作成した。

注：輸入量よりロシアへの移出量が多いのは、前年度までの在庫からの移出を含むため。なお、1889-91年についてはホラーサーン、1892-94年は北ホラーサーン（マシャッドとクチャン）、1894-95年以降はマシャッドへの輸入分である。

スからホラーサーンへの貿易額自体も大きく減少した。後述するように、1895-96年の急減は、バトゥミ・ルートが開始された結果である。1901-02年には、バンドルアップバス経由でインドからホラーサーンに輸入された総額は59,329 £にまで減少し、そのうちロシア領にトランジットされたのは緑茶（3,600 £）のみになった²⁴。

ホラーサーン総領事のEliasは、複数の情報源からバトゥミ・ルート開設直前の中央アジアへの緑茶のトランジット貿易を4点に整理している。以下に引用してみよう。

1. 1895年1月にバトゥム (Batúm) ・ルートが開かれるまで、中央アジアの緑茶貿易は合計で20万ポンド超とおおよそ評価されよう²⁵。
2. この茶の3分の2以上がメシェド (Meshed) 経由でもたらされ、残りはアフガニスタン経由でもたらされた。

3. メシエド経由でもたらされた緑茶の3分の2以上（ひよっとすると5分の4）は中国産であった。残りは、インドの現地民により、主にカングラ（Kangra）で製造されたお粗末なもので、飲用するのは最下層のボハラ人やトルコマン人に限られた。
4. 昨年、通常の年の半分の量の緑茶がこのルートで届けられ、インド産と中国産の割合はほぼ同じだった。インド産が（前年の）3分の1に満たなかったのは確実である²⁶。

表4 ボンベイ経由の中国茶のイランへの再輸出量

Year	Imports from China	Re-exported to Persia		Indian Tea Exported to Persia
	Lbs.	Lbs.	%	Lbs.
1890-91	3,820,646	2,973,787	77.8	615,331
1891-92	4,665,425	3,115,548	66.8	2,197,694
1892-93	4,779,775	3,240,763	67.8	884,665
1893-94	6,010,182	3,305,830	55.0	1,962,046
1894-95	4,613,581	3,961,253	85.9	2,087,668

出所："Report for the Year 1895 on the Trade of Khorasan." GBPP 1896, A&P, DCRTF AS 1800, p.9. より作成。

同じく1896年の報告書では、バトゥミ・ルートを懸念する中で、1890年代前半のイランに輸入される中国茶の量を示している。これによれば、1890年代前半には、中国からボンベイに400万～600万lbs.の茶が輸入され、そのうち5割～7割がインドからイランに再輸出された（表4）。これに比べると、イランに輸出されたインド産茶は少なかった。

ここで、各年の領事報告の内容を確認することで、バトゥミ・ルート開設以前の各ルートでのホラーサーンへの茶の輸入額とトランジット輸出の重要性について確認しておこう。1889-90年に415,000トマーン（118,571 ￡）程度の中国産の緑茶と、18,000トマーン（5,143 ￡）程度の中国産のブラックティーが、ボンベイからイランにもたらされたが、こ

れらはイギリス商人がボンベイで買い付けた中国茶であった。一方、インド産の緑茶は25,000トマン(7,143 ￡)、ブラックティーが42,000トマン(12,000 ￡)にすぎなかった。中国産の緑茶は、ほぼ全量がロシア領のブハラやヒヴァ、その他に送られ、インド産のブラックティーはもっぱらホラーサーン地方で消費された²⁷。他方で、ロシア領からホラーサーンに輸入された品目の項目に茶の項目はない。同様に、トルコ・ルートでホラーサーンへの茶の輸入はわずか4000トマン(1,143 ￡)にすぎなかった²⁸。

1890-91年の貿易報告では、ヤズドの商人が買い付けてボンベイから輸入されたすべての茶はサブゼワール経由でロシア領に直送されたとする²⁹。1890-91年にボンベイで買い付けられホラーサーンに運ばれた中国茶は111,016 ￡で、インド産の緑茶は6,765 ￡にすぎない。なお、98,365 ￡の緑茶はロシア領に通過した³⁰。バンドルアッパース経由でホラーサーンに輸入された総額は254,223 ￡なので、中国産の緑茶が4割を占め、その大半がそのままロシア領に向かった。逆に1890-91年にロシア領からホラーサーンに輸入された茶は73 ￡にとどまる。アフガニスタン経由の茶の輸入はリストにはない。トルコ経由でブラックティーが118ポンドのみ輸入された³¹。

要するに、イランに輸入された緑茶は、ほぼすべてがペルシア湾岸経由で輸入された。そしてペルシア湾岸の港で陸揚げされても、ほぼイラン領内で消費されず、そのまま中央アジアに通過したのである。イランでは緑茶ではなく、ブラックティーの消費が多かった。この時点で、イランでは今のように砂糖をたっぷり入れたブラックティーを飲む習慣が根付いたのである。ただし、先述したように、これ以前にはイギリス人のインドの茶栽培家が供給し、中国茶は少量であった³²。

(44)

(2) トランジット輸出の方法

1889年にホラーサーン（マシャッド）に英国総領事館（consulate general）が設立されると、最初の貿易報告が1890年に発行された。この報告では、ホラーサーンに至る交易路は2つあったことが記されている。ひとつが、黒海経由でトラブゾンまで船で運び、そこから陸路で、タブリーズ、テヘランを経て、ホラーサーンに至るルートである。このルートの利点は、トルコ政府が関税を徴収しなかったため、関税はイランに入国する際に5%がかかるのみだった³³。いまひとつのルートは、ペルシア湾経由でバンドルアッバースから陸路でヤズドないしケルマーンを経て至るルートである。ラバであれば40日、ラクダなら75日を要した。こちらに関税はイランで5%を払うだけで済んだ³⁴。この時点では、黒海経由のルートはペルシア湾経由ルートに比べて優位性はなかった。なお、アフガニスタン経由の場合は、アフガニスタンのアミール（首長）が課す高額の関税がかかったため、イラン経由のルートを利用する方が割安に商品を輸入することができた³⁵。

ロシア領中央アジアの中心都市はブハラであるが、ここにはペシャワール、ラーワルピンディおよびパンジャーブ各地の出身のインド人茶商（Indian tea traders）がおり、彼らは中国と直接取引するのではなく、インドと取引をした³⁶。しかも、インドと直接に取引をしたわけではなく、ブハラのパンジャーブ商人は、ホラーサーン地方の中心都市であるマシャッドとホラーサーンにとっての物資の供給センターであるヤズドに代理人がいた³⁷。ヤズドの商人やマシャッドの商人がボンベイに輸入された中国茶を購入すると、茶はヤズドやマシャッドの市場に送られ、そこで別のマシャッド商人が購入し、ロシア領に送られた。そして、イラン国内では茶の取引は伝統的な通商の方法である長期の掛け売りでなされた。

トランジット輸出で重要となるのが、ヤズドである。このヤズドでの取引を検討することで、緑茶のトランジット輸出の経路を確認することにしよう。「ヤズドは、ホラーサーン向けの物資の供給センターであり、ボハラにさえその交易はつながっている³⁸」とも「ペルシア人によれば、港のような性質を有する内陸の町」とも評され、イラン北部や中央アジア向けの商品が、南部の港から運ばれ、ヤズドで「積み替え (transshipped)」られ、各地に送られた³⁹。

1896年の報告では、「商業面では、ヤズドは、バンドルアッバースからマシャッドまでのほぼ1,000マイルに達する隊商路においてとりわけ重要な地点⁴⁰」で、

ヤズドは大きな交易センターであり、ペルシアの非常にたくさんの場所に商品を発送する。茶、とくにインド産は、ヤズドを通じて、ガズヴィーン、テヘラン、およびマーザンダラーン地方の諸都市、そしてホラーサーンに販路を見出す⁴¹

という。なお、ヤズドには2種類 (classes) の商人 (traders) がおり、ひとつはボンベイおよび南部から商品を輸入する業者で、もうひとつは前者から買って、ホラーサーンに向けて輸出をおこなう業者である。当時のヤズドには250の商人がおり、うち150人ほどが輸入専業で、75人が輸出専業、そして残り25人が北部の商人のエージェントであった⁴²。このように、中国の茶産地から中央アジアの間で、ボンベイやヤズド、マシャッドなど交易都市の商人が売買をつなげることで、最終的に中央アジアまで中国産緑茶は運ばれたのである。

ヤズドにおける主たる輸送手段はラクダであり、ヤズドの町とその周辺には南部との交易用に使用される5,000頭ほどのラクダがおり、ラバと

(46)

ロバも補足的に使用された⁴³。実際の貨物の形状は貿易報告により異なる情報が挙げられているが、一例を挙げれば、茶は182lbs. (82.6kg) の袋ないし梱で輸入されたが、上質の茶のみ50～60lbs. (22.7～27.2kg) のケースで輸入された⁴⁴。

(3) バトゥミ・ルート

1894-95年に輸入量が最大になった中国茶のトランジットは、翌年の1895-96年にほぼ壊滅した。この最大の理由は、バトゥミ経由の貿易ルートへのスイッチにある。イラン駐在のイギリス領事やインド政府がバトゥミ・ルートを脅威と考えるようになったのは、1894、95年頃のことである。しかも、同時期に、ロシア領中央アジアからヨーロッパ製とインド製品を締め出すことを目的に、ロシア政府は関税制度を変更し、外国製品に高い関税を課すようになった。

すでに1894-95年の貿易報告では、ロシアの保護政策が及ぼす茶貿易への影響が懸念されていた⁴⁵。この報告書によれば、1895年1月以前は、ボンベイ市場でのインド産茶の価格は8アンナ (annas) で、これは価格が1ルピーの中国産茶の半値であった。輸送費やイランで5%の関税が課税され、さらにトルキスタンでロシアの関税が課せられた後は、インド茶は1ルピー8アンナに、中国茶は2ルピー6パイサになった。したがって、中央アジア市場では中国茶の価格はインド茶の1.6倍になった。ところが、1895年1月以降の新課税では、茶の品位に応じて、6ルーブルないし14ルーブル40カペイカの関税が課せられることになった。これは、前者が5アンナ4パイサ、後者が12アンナ9パイサに相当する。そして、インド茶には低率の関税が、中国茶には高率の関税が課されることで、結果的にブハラでの価格は、中国茶が1ルピー11パイサに、インド茶が2ルピー4パイサになり、中国茶の価格はインド茶の1.8倍になっ

た。中国茶はインド茶に比べてロシアの新しい関税制度の影響を重く蒙ることになった。

一方、ペルシア湾ルートではなく、黒海の港バトゥミ・ルートを利用すれば、2アンナ9パイサ分の輸送費を削減できるとしている。また、ペルシア湾ルートでは、ボンベイからブハラまでの輸送に要する期間は少なくとも3ヵ月、たいていは6か月を要した。ところは、ボンベイ・バトゥミ間であれば22日で、その後を含めても全体で40日足らずでボンベイからブハラにまで輸送することができた⁴⁶。つまり、蒸気船で黒海の港バトゥミまで運び、そこから鉄道でカスピ海の港バクーまで運ぶと、蒸気船に積み替えカスピ海の対岸のOzanada (Krasnovodskのこと)に、そこから再び鉄道でアシガバードやブハラへ輸送するルートである。なお、翌年の報告では、茶はボンベイからバトゥミ経由でブハラまで36～50日を要するとしている⁴⁷。

これに加えて、ロシアは貿易を阻害するための様々な方策を実施した。たとえば、ロシアの関税政策の変更にともない、茶の密輸が増加すると予測されたが、ロシア政府は国境警備を強化し、密輸業者の取り締まりを本格的に行うことで密輸を阻止した⁴⁸。あるいは、1896年12月中旬にロシア企業の代表がブハラを訪問し、ブハラで活動するペシャワール商人に対しロシアの代理人から茶を購入するよう助言し、前貸しの提供を提案した。また、バトゥミ・ルートの輸入品はボンベイ経由の輸入品よりも2～3アンナ安価であることをアドバイスした。そして、ロシア企業は中国に代理店を設立し、中国で緑茶を買い付け、インド経由ではなく、バトゥミに直接輸出するようになった⁴⁹。

(4) バトゥミ・ルートの開通後

交易センターとしてのヤズドの変化もみておこう。輸送費用は貿易報

(48)

告の各号で報告されている。1898-99年の報告によれば、36lbs.の重量の荷物の輸送費用が、モスクワからマシャッドに送る場合、夏は7krans程度、冬は11krans程度とされる一方で、バンドルアップースからマシャッド19krans、タブリーズからマシャッド16.5krans、クエッタからマシャッド（Nushikiルート）15kransとなっている⁵⁰。従来の主要ルートであるバンドルアップース・マシャッドの輸送コストが他のルートに比べて高コストであることがわかる。

この結果、ヤズドの交易センターとしての地位は弱まることになる。1905-06年の報告では、ヤズドの副領事の指摘として、ヤズドの交易センターとしての重要性は徐々に衰退して来たが、特に過去五年間で衰退したとしている。その理由は、バトゥミ・ルートの開設、トランスカスピア鉄道の建設、インド政府によるクエッタ・ヌシキ（Nushiki）・スイースターン・マシャッド交易ルートの整備のせいであるとしている⁵¹。

この副領事の報告では、統計が入手困難であるとしながら、

1906年中には、6,500lbs.程度の中国産の「アパル（Appar）」という名称の白茶が、地元の消費のみを目的として輸入された。その年の中国産の緑茶とブラックティーの輸入はなかった。「ラムサル（Lamsar）」というジャワ茶の年間の需要は、一箱あたり10lbs.の1,000ケース程度と見積もられる。ヤズドの商人は、クムやカーシャーン、テヘランにこの茶を供給し、これらの場所ではこの茶に対する需要が急増していると言われている。あったとしても、ごく少量がホラーサーンに送られたにすぎない⁵²

としている。このように短期間のうちにバトゥミ・ルートが有力になり、ヤズドの経済に甚大な影響を及ぼしたことがわかる。ロシア政府は矢継

ぎ早に様々な優遇策を打ち出し、例えば、イランないしアフガニスタン経由でロシア領中央アジアに入る茶には、lb.あたり31.5ルーブルの関税が課せられたが、バトゥミ・ルートを使うと中央アジアで消費されると申告された緑茶には、lb.あたり12ルーブルしか課せられなかった⁵³。

しかも、ロシア領の中央アジア向けにとどまらず、イランへの茶供給全体がロシア経由にスイッチすることになる。この点を確認するために、バトゥミ・ルート開通後のエスファハーン市場の動向をみておこう。エスファハーンはテヘランやタブリーズに並ぶ、イラン中央部の最大の都市である。1911年の報告書では、エスファハーンへの茶の輸入が1904年以降急速に減少したとしている。理由は複数挙げられているが、最大の理由は、やはりロシア経由の茶の輸入にある。以前はエスファハーンがテヘランやカスピ海諸州への茶の供給センターであった。ところがエスファハーンのお得意様だったこれらイラン北部の諸市場へは今やロシア・ルートから供給されるようになった。ロシア・ルートにスイッチした理由は、このルートの運賃の安さであり、またロシアの銀行が提供する支払いに関する便宜によってである。

これに加え、シーラーズ・アフワーズ・ルートの治安が悪化することで、エスファハーンはペルシア西部の供給センターの地位を失った。そのポジションは、相対的に安全なケルマーンシャー・ルートの利用が増加し、このルートの交易都市ハマダーンに奪われた。その結果、エスファハーンへの茶の輸入は、その町と近隣地区、すなわち半径40から50マイル程度の範囲の需要に限定されるようになった。それでも、これらエスファハーンに輸入されるインドや中国、ジャワ産の茶のほとんどが南部から運ばれ、「ロシア茶 (Russian tea)」と呼ばれるごく少量のインドと中国産の茶が、北部から輸入されたにすぎない⁵⁴。

表5にはイランへの国別の茶の輸入額を示した。実際、20世紀に入る

表5 イランへの国別の茶輸入額

国名	1908-09	1909-10	1910-11
	£	£	£
インド	282,317	325,055	279,845
ロシア	146,541	200,066	191,387
オランダ	6,587	8,018	19,213
中国	3,397	7,597	4,813
大英帝国（インドを除く）	139	60	526
トルコ	113	11,236	589
アフガニスタン	-	9	4
その他	3	16	71
合計	439,097	552,057	496,448

出所："Report on the Trade of Persia for the Year 1910-11 by Mr. W. J. Garnett." GBPP 1912, A&P, DCR AS 4955, p.9 より作成。

と、イランに輸入される茶は、インドとロシアからの輸入に二分された。当然、インドからの輸入には、中国産の緑茶やブラックティー、あるいは白茶が含まれるが、ロシアからの輸入もインド産や中国産である。

このバトゥミ・ルートへの開設による、ホラーサーン経由の緑茶のトランジット輸出の危機に際して、ホラーサーン領事はすでに1896-97年の報告において、可能な限りの資料を集めて、茶貿易の問題を多角的に検討している⁵⁵。具体的には、インド政府、ボンベイの税関、カルカッタの緑茶輸入業者、ロシアの公式統計、バトゥミ領事、インドのヨーロッパ人茶農園主などから情報を収集している。インド政府からの情報では「バトゥミ・ルートの開設の結果、ボンベイは中国茶の交易センターとしてのその地位を失う危険がある…今や中央アジアの商人は茶を中国に直接注文し、ボンベイではなくポートサイド経由で行うようになりつつあるとも言われる⁵⁶」と強い危惧が示された。

なお、インド政府は、バトゥミ・ルートに対抗するために、1896年にヌシキ・ルートを開発し、当初は茶商人もこのルートで茶をインドから

ブハラに輸出することに関心を持ったが、成功しなかった⁵⁷。

IV おわりに

本稿では、第一次世界大戦以前の東アジアからイランへの輸出動向を検討した。最後に、明らかになったことをまとめておこう。

ペルシア湾経由によるブハラを含む中央アジア市場への中国産緑茶のトランジット輸出の歴史は古い。ただ、本格化したのは意外に遅く、1880年代に入ってからと思われる。すでに中国向けに輸出されるイラン産アヘンは、ペルシア湾岸諸港の最大の輸出品目となっていたものの、輸入に関しては、イギリスや英領インドからの製品が圧倒的で中国製品や日本製品のプレゼンスは緑茶を除きほとんどなかった。その点、緑茶は特別な品目であり、しかも短期間で取引が拡大し消滅した点も特筆すべき点だろう。そして、それ以前はインド産緑茶がイランやアフガニスタン経由で中央アジアに送られたとされるが、インドにおける茶樹栽培の歴史を考えるとこの交易も短い期間のみ実施されたにすぎない。

マシャッドにイギリスの領事館が設立されると、ホラーサーン経由の中央アジアへのトランジット輸出の統計が継続的に利用可能になる。1890年代に入ると、緑茶のトランジット輸出額は毎年10万£以上の水準を維持し、1894-95年には20万£を超えた。この時期、莫大な量の茶が、駄獣の背で揺られ、はるばる中央アジアまで旅したのである。こうした緑茶のトランジット輸出は、ブハラなど中央アジアのインド系の茶商人が担ったが、彼らは直接中国やボンベイに注文し、直送されたわけではない。中国産の茶は、まずボンベイに運ばれ、ボンベイから蒸気船でペルシア湾岸のバンドルアッパース港に運ばれると、そこで陸揚げされ、ラクダやラバの背に揺られ、交易都市であるヤズドないしケルマーンに運ばれた。そこで売買されると別の業者が再びラクダやラバでマシャッ

ドまで運び、マシャッドで売買され再び別の業者がブハラに発送した。さらに、ブハラからは中央アジアの他都市に販売された。このように、中国の茶産地から中央アジアの間で、ボンベイやヤズド、マシャッドなど交易都市の商人がそれぞれの市場で仲買商人として売買することで、次の交易拠点の商人に緑茶が送られ、その売買の繰り返しが鎖のようにつながることで最終的に中央アジアまで中国産緑茶は運ばれたのである。

ところが、緑茶のトランジット輸出は1895-96年には、ピークだった1894-95年の4分の1に減少し、以降も水準を回復しなかった。その最大の理由は、バトゥミ・ルートの開設による。このルートでは、蒸気船で黒海のバトゥミに物資を運ぶと、鉄道でカスピ海西岸のバクーまで運んだ。さらにバクーから船でカスピ海を横断し、カスピ海東岸で鉄道に積み込み、アシハバードやブハラ、メルヴに輸送する。つまり、蒸気船網と鉄道網の発達が、時間距離と費用距離を大幅に縮めた結果、物理的な距離の近さで中央アジアとの交易路として優位にあったイランの陸上ルートをこの新ルートが圧倒するようになった。これにより、複数の仲買商人を経由する従来の交易方法にも変化が生じ、中国やボンベイから中央アジアに直送することが可能になった。

日本製品がイランを含む世界の諸市場に本格的に進出するのは、本稿で扱った時期の後のことである。すなわち第一次世界大戦中の欧州からのアジア輸出の寸断を、日本の産業界はこれを奇貨として、欧州製品の独壇場であった世界各地の市場に進出するようになる。その時期には既に蒸気船網や鉄道網がかなりの規模で整備され、低コストかつスピーディーで大量にものを運ぶことができるようになっていたのである。その点で、イラン経由の緑茶のトランジット輸出は、グローバル化により東西の交易が盛んになる中で、近代的な蒸気船網と鉄道網の整備され

る途中に出現し、これらが整備されるやいなや近代的な輸送機関に道を譲ったのである。

〔付記〕本稿の執筆にあたっては、科学研究費補助金（基盤研究（C）『近代日本のグローバルな貿易－生産構造の展開と中東地域との相互依存関係をめぐる研究』研究課題番号：21K12420，研究代表者：黒田賢治）を使用した。

注：

- 1 岡崎正孝「19世紀イランにおけるケシ作の進展」『経済研究（一橋大学経済研究所）』31-1, 1980年, pp.72-80；Seyf, A., “Commercialization of Agriculture: Production and Trade of Opium in Persia”, 1850-1906, *International Journal of Middle East Studies*, 1984, 16, pp.233-250.
- 2 岡崎正孝「19世紀後半のイランにおける養蚕業の衰退とギーラーン」『オリエント』27-2, 1982年, p.73.
- 3 わずかではあるが、1903年3月21日から1904年3月20日の間にケルマーンシャーに輸入された品目のリストに、日本製の正絹が1882.8Krans（33.6 匁）あったと記載されているが、翌年には記載がなくなった（“Report for the Year 1904-05 on the Trade of Kermanshah, 1905.”, Great Britain Parliamentary Papers（以下、GBPP）, Accounts & Papers（以下、A&P）, Diplomatic and Consular Reports（以下、DCR）Annual Series（以下、AS）3420, p.11）。
- 4 左近幸村『海のロシア史 ユーラシア帝国の海運と世界経済』名古屋大学出版会, 2020年.
- 5 *Ibid.*, pp.60-61.
- 6 水田正史「ロシアの中央アジア進出とホラーサーンの貿易—西暦1882～1890年—」『社会科学（同志社大学人文科学研究所）』66, 2001年, pp.55-75.; 水田正史「西暦19世紀におけるイラン北東部の貿易—カスピ海以東のイラン・ロシア国境の画定以前—」『経済学論叢（同志社大学経済学会）』52-2, 2000年, pp.82-101.
- 7 農山漁村文化協会編『茶大百科Ⅰ』農山漁村文化協会, 2008年, 6頁。
- 8 Hann, C.M., *Tea and the Domestication of the Turkish State*, 1990, Eothen Press, p.9.
- 9 Kāzīmī, S., *Hājī Muhammad Mīrzā Kāshif al-Salṭānah: Pedar-e chāi-e Irān*, 1997/1998, Tehran: Nashr-e Sāyeh, p.51.

- 10 Lemanczyk, S., *The Transiranian Railway – History, Context and Consequences, The Middle Eastern Studies*, 2013, Vol. 49, pp.237-245.
- 11 Burnes, A., *Travels into Bokhara*, Vol.3 (2ed.), 1835, John Murray, p.350.
- 12 Lal, M., *Travels in the Panjab, Afghanistan, & Turkistan, to Balk, Bokhara, and Herat*, 1846, p.193.
- 13 “Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Persia. Report for the Year 1896-97 on the Trade and Agriculture of Khorasan.” GBPP, 1897, A&P, Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance (以下、DCRTF) AS 2008, p.12. なお、これら3産地は、今のKumaonとDehradunがウッタラーカンド州、Kangraはヒマーチャルプラデーシュ州の茶産地である。
- 14 “Report for the Year 1895 on the Trade of Khorasan.” GBPP 1896, A&P, DCRTF AS 1800, p.15.
- 15 “Report by Consul-General Ross on the Trade and Commerce of the Persian Gulf for the Year 1879.” GBPP 1880, A&P, Commercial No.43, Trade Reports, Reports from Her Majesty’s Consuls on the Manufactures, Commerec, &c., of Their Consular Districts Part VII, Bushire, p.1744.
- 16 *Ibid.*, p.1749.
- 17 *Ibid.*, p.1757.
- 18 *Ibid.*, p.1763.
- 19 Confidential Print and Piece Number FO 881 5728/ 1 (i), Date 6 Dec.1888, “British Trade and Foreign Competition in North Persia.” in D. Gillard ed., *British Documents on Foreign Affairs, Part I, Series B, Vol.13, Persia, Britain and Russia, 1886-1907*, University Publications of America, 1984, p.45.
- 20 “Report on the Trade and Industry of Persia.” GBPP 1887, A&P, DCRTF AS 113, p.13.
- 21 *Ibid.*, p.15.
- 22 “Report for the Year 1893-94 on the Trade of Shiraz.” GBPP 1894, A&P, DCRTF AS 1474, pp.7-8.
- 23 “Report for the Year 1895 on the Trade of Khorasan.” GBPP 1896, A&P, DCRTF AS 1800, p.9.
- 24 “Report for the Year 1901-02 on the Trade of Khorassan and Sistan.” GBPP 1902, A&P, DCR AS 2921, p.17.
- 25 “Report for the Year 1895 on the Trade of Khorasan.” GBPP 1896, A&P, DCRTF AS 1800, p.8.
- 26 *Ibid.*, p.9.
- 27 “Report for the Year 1889-90 on the Trade of Khorassan.” GBPP 1890, A&P,

- DCETF AS 753, p.3.
- 28 *Ibid.*, p.8-9.
- 29 “Report for the Year 1890-91 on the Trade of the Consular District of Meshed.” GBPP 1892, A&P, DCRTF AS 976, p.2.
- 30 *do.*
- 31 *Ibid.*, pp.16-19.
- 32 “Report for the Year 1895 on the Trade of Khorasan. ” GBPP 1896, A&P, DCRTF AS 1800, p.12.
- 33 “Report for the Year 1889-90 on the Trade of Khorassan. ” GBPP 1890, A&P, DCR ATF AS 753, p.1.
- 34 *Ibid.*, pp.1-2.
- 35 *Ibid.*, pp.2-3.
- 36 “Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Persia. Report for the Year 1896-97 on the Trade and Agriculture of Khorasan. ” GBPP 1897, A&P, DCRTF AS 2008, p.15.
- 37 “Report for the Years 1892-93 and 1893-94 on the Trade, &c., of the Consular District of Ispahan. ” GBPP 1894, A&P, DCRTF AS 1376, pp.19-20.
- 38 *Ibid.*, p.19.
- 39 “Report for the Year 1894- 5 on the Trade of Ispahan and Yezd. ” GBPP 1896, A&P, DCRTF AS 1662, p.16.
- 40 *do.*
- 41 *Ibid.*, p.17.
- 42 *do.*
- 43 “Report for the Years 1892-93 and 1893-94 on the Trade, &c., of the Consular District of Ispahan. ” GBPP 1894, A&P, DCRTF AS 1376, p.22.
- 44 *Ibid.*, p.20.
- 45 “Report for the Year 1894-95 on the Trade, &c., of Khorasan. ” GBPP 1895, A&P, DCRTF AS 1607.
- 46 “Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Persia. Report for the Year 1896-97 on the Trade and Agriculture of Khorasan. ” GBPP 1897, A&P, DCRTF AS 2008, pp.7-8.
- 47 *Ibid.*, p.15.
- 48 *Ibid.*, p.14.
- 49 *Ibid.*, p.15. なお、左近によれば、1890年代初頭の時点ですでに、漢口で茶の買付を行うロシアの商社の数は27社を数え、1890年代にはロシアが中国茶の最大の購買者になった（左近幸村『海のロシア史 ユーラシア帝国の海運と世界経済』名

(56)

古屋大学出版会, 2020年, pp.71-72)。また、20世紀に入る直前からロシアはインドやセイロンからの茶の輸入を増やした (同書, pp.215-217)。

- 50 "Report for the Year 1898-99 on the Trade and Commerce of Khorassan. " GBPP 1899, A&P, DCR AS 2368, p.4.
- 51 "Report for the Year 1906 on the Trade of Ispahan and Yezd. " GBPP 1907, A&P, DCRTF AS 3748, pp.6-7.
- 52 *Ibid.*, p.11.
- 53 "Report on the Condition and Prospects of British Trade in Persia by H. W. Maclean, Special Commissioner of the Commercial Intelligence Committee of the Board of Trade. " GBPP 1904, XCV, A&P, p.32.
- 54 "Report for the Year Ending March 20, 1911, on the Trade of Ispahan and Yezd. " GBPP 1912, A&P, DCRTF AS 4838, p.15. 中国やインド産の茶はロシアに運ばれると、そこで小分けに包装してから、イランなどに「ロシア茶」として輸出された。
- 55 "Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Persia. Report for the Year 1896-97 on the Trade and Agriculture of Khorasan. " GBPP 1897, A&P, DCRTF AS 2008, p.8.
- 56 *Ibid.*, p.10.
- 57 *Ibid.*, pp.18-19.